

遊びの位置づけの違う保育現場における保育者の実践上の課題(2)

藤澤 麻里 (東京家政大学大学院生¹⁾)

1. 問題と目的

幼稚園教育の基本として「遊びを通じた総合的な指導」があげられているにもかかわらず、多くの幼稚園では、遊びの時間がほとんどなく、「やらねばならない活動」(以下<活動>)が中心になっている現状がある。第68,69回大会では、筆者自身の実践記録、A保育者の語りから、<活動>中心の園において、遊び中心の保育をしたいと思いつながらできない場合、幼児が最も経験してほしい内容を吟味することで、僅かな遊びの時間を保障していたことを明らかにした。²

本研究では、遊び中心の保育をしたいと思いつながらも<活動>が多い園に勤務し、かつ勤務途中で特別プログラムが導入され、さらに<活動>が増える経験をしたB保育者の語りを分析する。特別プログラム導入前は、B保育者も筆者やA保育者と同様、遊ぶ時間を捻出するために、幼児の経験する内容を吟味していたことがその語りの分析から明らかになっている。しかし、導入後、新たな実践上の課題にぶつかることになった。その課題を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 研究方法

調査方法: 半構造化インタビューを実施し、逐語化したデータの中から、保育実践上の課題について分析した。

対象者: 関東地区にある私立幼稚園g園に勤務経験のあるB保育者。今回分析の対象とする語りの内容は、20XX年5歳児クラス担任時、特別プログラム導入後のものである。遊び時間は、朝の約20分間と給食を早く食べ終えた幼児にのみ僅かの時間が保障されていた。しかし、どちらもその時間が<活動>で埋まることも多かった。(詳細は当日配布)

倫理的配慮: 調査対象者には、本研究の目的、プライバシーへの配慮、ICレコーダーによる録音等の事前説明を行い、同意書によって承認を得た。

3. 結果と考察

特別プログラム導入前も、遊ぶ時間は少なかった。しかし、特別プログラム導入後は、一日の保育が<活動>で埋め尽くされ、全く遊ぶ時間が無くなった日もあったことが語られた。その状況に対する葛藤を表したB保育者の語りである。

※ ()内は筆者による補足。

・特別プログラムが入ってからのほうが、完全に窮屈になってしまっていて(中略)。(特別プログラム導入前は)忙しいながらも少しまだ外遊び(園外も)行こうね、とかできたのに。
・突然、特別プログラムを全部やれと言われて。(中略)特別プログラムをしてからは、本当に(遊ぶ時間が)0分だったときもあって。
・もちろん一番つらかったのは子どもですね。遊ぶ時間がなかったって、泣いて帰った子がいたことが一番ショックでした。
・私は、特別プログラム導入前段階を知っているので、ただ窮屈になっただけで、子どもが楽しそうに

特別プログラムをやらされているんですけど…正直、ただ私たちが耐えられなかったんです。それに(中略)子どもたちがやりたいと思っていること(遊び)を一個もしていないじゃんとおもったので、そこをどうにかしたかった。

この状況に対して、最大限できたことを次のように語っている。

・遊びはできないじゃないですか。じゃあ主体的に何ができるか(中略)お昼を食べる場所を自分で選ばせるとか、本当にそういうぐらいですね。かわいそうなんですけど。
・ちょっとでも何か、せつかく園庭にでたのに。なんで特別プログラムで走らされただけで終わりなの(中略)。「1個だけ好きな(遊具)やってから(部屋に)帰るよ」とか(中略)子どもに選ばせてみたり。
・ちょっとした工夫みたいなことはできましたけど。時間のかからない。それぐらいで子どもたちに遊んだ感を味わわせてあげるっていうのが、正直なところ限界だったかなと。

ここでは、実際には遊ぶ時間が全く無いまま園庭で<活動>が終わり、部屋へ戻る僅かな時間に、幼児が触れる遊具を選ぶことをもって「主体的」と述べている。さらに「遊んだ感を味わわせてあげるっていうのが、正直なところ限界だったかな」とささ語っている。この語りからは、やむを得ない状況の中だからこそ「主体的」と言っているのであって、決して本来の意味での「主体的」だとは言っていないことが解釈できる。B保育者は、前述したように特別プログラム導入前は、幼児の経験する<活動>内容を吟味する力を持ち続け、少しでも遊びの時間を捻出していた保育者であった。それにもかかわらず、B保育者であっても、さらに特別プログラムが導入されたことによって、語りとしては「主体的」という言葉は使っていても、限界と言わざるを得ない状況に陥ることがわかった。つまり、どんなに<活動>内容を吟味したところで、保育形態によっては、遊ぶ時間が捻出できない課題にぶつかっているとと言える。

これまでの研究において、保育者が遊びの時間を大切にしたいと思った場合、<活動>中心の園でも幼児の経験内容を吟味することによって、遊びの時間を捻出していたことが明らかになっている。しかし、B保育者の語りからは、どんなに幼児の経験内容を吟味し、工夫しても、遊びの時間の捻出が不可能になるということが明らかになった。つまり<活動>の分量が多くなりすぎると、質を保障しながら遊びの時間を捻出しようとしてもできないということが、B保育者の語りから明らかになった。

注

1 人間生活学総合研究科 児童学児童教育学専攻

2 藤澤麻里(2015)「遊びの時間を保障するための経験内容の吟味—保育者という限界の中で見出した方策についての検討」日本保育学会第68回大会発表要旨集/(2016)「遊びの位置づけの違う保育現場における保育者の実践上の課題—課題解決過程にみられた経験内容の吟味」日本保育学会第69回大会発表要旨集